



脳行動学講座 27






朝顔ってすごい! ~疑問と感動が探究意欲を生み出す~

研究開発部 矢口みどり

「どれが咲くかな」小学4年の娘と翌日咲きそうな朝顔のつぼみを探した、ある夏の朝。「あれ?」「咲きそうなのないよ」「大きいつぼみないね」「明日は咲かないのかな」「今まで毎日咲いていたのに」

しかし翌朝。「お母さん咲いてる!」「ホント!」「そんなに大きいのがなかったのに」「1日で大きくなっちゃったのかな」「うっそ~」「でもそうとしか考えられない」「調べてみようか?」こうして娘と私の朝顔の一日観察が始まった。20年前の夏休みのことである。

時間を決めて観察に行き、つぼみの長さを測り写真に撮った。つぼみはどんどん大きくなり、昼過ぎには倍近くになった。「あつという間に大きくなるね」「こんなに早く大きくなるなんて思わなかった」「朝顔ってすごい!きっと明日ひらくね」か弱いと思っていた朝顔のエネルギーを、娘が感じ取った瞬間であり、同時に、開花するまでを是非とも見届けようという探究の意欲が芽生えた瞬間でもあった。

午前9時	午後3時	午後6時	午後9時	午前0時	午前3時
約3 cm	約5 cm	約6 cm	約7 cm	約8 cm	約9 cm
一つをつぼみに目をつけて縦の長さを測ることにした					
	どんどん大きくなっていく			他のつぼみも皆大きくなっている	

だんだん暗くなり、6時からライトをつけて撮影。花は真夜中を過ぎてはまだ成長していく。「今日は徹夜だね」午前2時には9cm、最初に測ったときの3倍になった。そして3時、つぼみは閉じた傘を広げるように少しずつ開いてきた。

「もう開き始めるんだ。真っ暗なのに」と驚く娘。つぼみはゆっくりゆっくり、5時までかかって開花。他のつぼみも殆ど開いた。「毎日こうして咲いてたんだね」「朝顔ってえらいね~」娘は朝顔に畏敬の念さえ抱いている。眠い目をこすりつつ、とうとう開花までの観察をやりきった。



午前5時 完全に開花

本来、人間の脳は探究的であるという。赤ん坊は何でも口に入れ、小さな子どもは「あれなに?」「これなに?」と親を質問攻めにする。しかし大きくなるにつれ、知識を詰め込むという行動の積み重ねにより、それは失われていく。親や学校がその芽を摘んでいるということではないか。

現在、我々が拠り所としている知識や技術が20年後に通用しているかと考えてみると、そうではないという確率の方が高い。それは、20年前の知識や技術が今どれほどそのまま活着しているかを考えれば容易に想像がつく。つまり、子どもたちには、自分で調べて知識や技術を掴み取る、探究的な姿勢を育てておかなければならないということだ。

探究の出発は疑問と驚きである。生活の中にも、自然環境の中にも、また歴史的事実の中にも、その材料はたくさん転がっている。単なる知識として覚えさせるのではなく、その材料の中に放り込み、疑問を起こさせ、感動を体験させ、探究の世界に入れてやるのが親や指導者の役目だと実感した日だった。♥